

これからの神戸大学と凌霜会と六甲台後援会

社団法人凌霜会理事長
財団法人神戸大学六甲台後援会理事長

新野 幸次郎

先進諸国の少子化と、あらゆる分野での新機軸の展開とグローバルゼーションの中で多くの国々は抜本的な改革を迫られている。わが国の国立大学もこうした流れの中で法人化し、「自立」のための諸問題に立ち向かおうとしている。もつとも、いま法人化したと書いたが、予めその必要性を国立大学の多くの教職員が自覚し、自主的に法人化に踏み出したわけではない。率直に言って、そのための主体的な自覚も十分ではなく、何よりもそのための体制を自主的に作り上げる準備もないままに法人化させられることになったのであるから、実際にスタートしてから諸々の困難に立ち向かわざるを得なくなっている。その意味では、わが母校神戸大学もいま大変である。

もつとも、私は今は現役の教員ではなく、せいぜい新しい制度で設けられた母校の経営

協議会の一委員にすぎない。したがって、本当に身の裂ける思いで解決を迫られた諸問題と向き合っているとは言えない。こうして大学内部で生じている諸問題に全身全霊をかけているとは言えない身で大きなことを言う資格もない。しかし、母校卒業生の一人で社団法人凌霜会と財団法人神戸大学六甲台後援会の理事長を命ぜられている者として、評論に終わらないようにしなければと配慮しながら、会員の皆さんに呼びかけ、ご協力をお願いする一文を取りまとめることにした。ご一読のうへ、熟慮を賜りたい。

まず少子化の影響から

まず、少子化である。平成四年時の十八歳人口は二百五十万人であったが、昨年生まれた人は百二十万人になったから、十八年後には半分近くに減少する。また、大学の進学希望

者と大学の入学定員とは、あと二年で完全に同数になる。それだけではない。今迄は、大学の新設や学部・学科などの増設・変更などは、すべて大学設置審議会で認可しないとできないことになっていたが、最近ではそれが大げさに言うとはば自由になった。したがって、各大学では、科学技術や社会経済の動向などと関連して、新しい構想を次々と樹立することができるようになった。言いかえれば、大学間の競争は極めて激烈になってくる。おまけに、以前にもふれたことがあるが、同じ国立大学でも、自然科学系の研究所を多く持っている大学とそうでない大学とで、大学が自由に動かせる運営費総額が何倍も違ってくる。文科省は、これから大規模な国立大学としては、従来の旧七帝大とそれに神戸・筑波および広島の大大学を加えた十大学を、いつもおよび広島の大大学を加えた十大学を、いつも頭において比較検討するように考えているようである。しかし、わが母校の運営交付金に比べて東京大学は四倍、京都大学は三倍、大阪大学は二倍という状態である。

東京大学の小宮山学長は、つい最近も東大を国際的な素晴らしい大学にするために、全

国の大学の先生方が進んで就職を希望し、そこで教育・研究をしたいと思う大学にしなければならぬ、そのためには、基金も豊かにして給与・研究条件でも他大学と差ができるようにしなければと言っておられる。わが母校もこうした動きの中で、学生諸君と教員の皆さんにその存在意義が高く評価されるようになっていなければならない。おまけに、最近の学生はトイレが綺麗で食堂が立派でない大学は避けようとするなどと言われる時代である。大学は新しい競争にさらされるようになったと言わなければならない。

新結合、新機軸の時代

次に、皆さんよくご存知のJ・シムムペーターが力説していたように、現代は文字通り新結合、新機軸の時代である。ひとりモノづくりの技術だけではなく、社会の在り方、産業・企業組織の在り方、顧客対応の仕方などでも、今迄見出されていなかったニッチを発見し、新しい発想をして需要に対応して行かなければ生き残れない時代になった。大学はこうした新機軸開発の最大の拠点のほ

ろ。最近、元三重県知事の北川正恭教授（現在は早稲田大学公共経営研究科教授）は、北京の蝶々が、ハリケーンを生み出すという気象学者の言葉を引き合いに出して、自分で舞い始める蝶々の動きがとれる組織は飛躍的な発展が可能になると訴えておられる。神戸大学がこの新機軸・新結合の時代の拠点になるためには、そこで研究・教育に従事している全ての構成員が北京の蝶々になり、日本の科学技術や企業・産業経営の新結合・新機軸を生み出す人達の集まりにならなければならない。その可能性のある大学は、どんなに寄付金を集めることが難しい時代でも、いわゆる競争的研究資金を獲得して行けるはずである。そう言えば、日本の代表的大学の中には、最近その研究・教育能力の自信を背景に、彼らの生み出せる知的財産を証券化して資金獲得を図ろうと企画しているものもある。幸いにして、皆さんが卒業された法学部・経済学部・および経営学部は、一橋大学と並んで東京高商および神戸高商以来の社会科学系の殿堂の一つとしての地位を守り続けている。殊に、一橋大学の商学部と神戸大学の経

営学部は、旧帝大には存在しないということもあって、国立大学間競争でも独特の地歩を占めている。関西のある経済団体が経営学関係の体系的講座を開こうとすると神戸大学の先生方を中心とせざるを得ないと言われるのも理由のないことではない。法学部も例の法科大学院で、ある有名週刊経済誌が最優秀の評価を与えていた成果を誇っている。また、経済学部も例えば今年設置が決まった「EUI インスティテュート・イン・ジャパン関西」の設置が象徴しているように依然として全国的にも優れた評価を得ている。

ロジスティクス関連の講座

シムムペーターの言うイノベーション、すなわち新結合は、知られているようにモノづくりの技術革新だけではなく、旧神戸商業大学・神戸経済大学以来の伝統を受け継ぐ神戸大学の六甲台五部局（法・経済・経営の三大学院研究科に国際協力研究科と経済経営研究所）の蓄積・開発している知的財産の証券化は、こうした蓄積を基礎にして可能になるかも知れない。最近、私自身東京のある方から、

神戸は歴史のある国際港都であるだけでなく、神戸大学には他の国立大学には少ない海運・陸運をはじめ、工学関係の港湾問題を含めると余計ロジスティクス関連の講座および研究部門が多く蓄積の豊かな大学である。おまけに、今度はいくつかのロジスティクス関連講座を持つ商船大学が海事科学部として統合された。物流と人流はグローバリゼーションの進展の中で経済文化活動にとつてもこれからますます重要になる分野である。その一大研究教育拠点を神戸につくつてはと言われたこともある。

また考えてみると、神戸は、単位生協としては世界でも最大の生活協同組合コープこうべや、いま再建に苦闘しているとはいえ、かつては日本の流通革命の担い手となった株式会社ダイエーの誕生した都市である。かつては、兼松株式会社や鈴木商店が生まれた都市でもあり、現在でもいくつかの新機軸を生み出している企業もある。マーケティングに關した優れた研究者も蓄積されている。こうして領域研究と人材育成の牙城をつくり、全国で他にはないオンリー・ワンの大学として

その知的財産を蓄積することも不可能でないと言えよう。

もちろん、五部局以外にも、例えば、急逝された西塚泰美先生が象徴的なように、ノーベル賞が最も近いと言われた世界的に有名な研究者もおられる。こうした優れた研究者を応援しながら、私達はこれからますます激しくなる大学競争に勝ち残れるようお手伝いしなければならぬ。

グローバリゼーションの展開

大学の直面しているグローバリゼーションの展開もまた大学間競争の大きな条件になっている。特定の職業でグローバリゼーションの典型になった一つは、メジャー・リーグの選手たちであることは良く知られている。大学の研究者・教員もそれに似たところがあり、俸給がよく研究・教学の諸条件がよければどこにでも転籍する傾向がある。グローバリゼーションの展開の中で、最近は外国人留学生の獲得でも、また、自国学生の海外大学や大学院への流出にも真剣に対応しなければならなくなつた。優れた教員・研究者を今迄通り

にその大学に残存して貰うだけでなく、優れた教員・研究者を招聘するために、ひとり国内他大学との俸給・研究条件の格差のないように努めなければならなくなるだけでなく、国際的な配慮も必要になつてきつつある。最近、米国でも情報科学分野ではトップの地位にあると評価されているカーネギー・メロン大学の情報安全専攻の大学院が神戸市内に進出することになった。現在は、授業料が日本のそれに比べると格段に高く、いろいろな課題を抱えている。しかし、欧米の大学・大学院は今迄のように自国内への留学を推進するだけでなく、外国にその分校を開学することによつて、研究教育体制の国際的優位性を確保しようとしている。こうした事態に対応するためには、わが凌霜会員の母校である六甲台五部局も抜本的な改革を図らねばならない。大学の革新・充実は何と言つても現在その研究・教育に当たつて頂いている教職員と学生諸君によつて担当して頂かなければならない。しかし、そのためには、そうした革新を実行できる精神的・財政的なバック・アップ体制が、できれば、米国の大学までとは言

わなくても確立されることが望まれる。

巨額な米国の大学基金

米国はご承知のように、資格社会であることもあって卒業生はその資格獲得を保証した出身母校に強い誇りを持っている。大学も競争的研究費や寄付金の獲得がその競争力の重要な条件になっていることの強い認識もあって、ホーム・カミングデイの設定や大学スポーツや文化活動の展開に極めて熱心である。寄付金を主たる源泉とした大学独自の基金でも、以前に何回かふれたようにわが国とは比較にならない巨額である。ちなみに、最大のハーバード大学は百九十三億ドル、イエール大学も百億ドル、スタンフォードで八十六億ドルといった調子である。しかも、イエール大学の基本財産の運用利回りは、一時期は年二十五%を超えたりしたときもあると言われ、ハーバードはつい最近でも一〇%を優に超える利回りを確保していると報ぜられている。ハーバードの基金利息が東京大学の年間予算に近いと言えばその巨額さに眼を見張らざるを得ないであろう。

その点、わが国の国立大学の場合は、極端に少ない基金しか確保できていない。わが財団法人神戸大学六甲台後援会の場合でも、諸先輩のご努力で基金積立てがなされたが、現在はロイ・スミス館（土地面積一、六九五平方メートル）建物面積七六三平方メートルを含めて、資産は約十三億円余にすぎない。しかし、私は、ここで取り上げた三つの大きな大学を囲む環境変化の中の国立大学法人化に当たって、卒業生の皆さんの努力で新しい歩みが可能になるのではないかと思つている。

先輩方の熱い心に打たれた

と言うのは、私の現役時代、私は何人かの先輩方の熱い心に触れてきているからである。私は、経済学部部長時代、神戸大学三学部の創立七十五周年記念式典を持つことができた。その時、かつて副総理大臣の大役を果たされた大学正門の「神戸大学」という題字を書いても頂いた石井光次郎さん（明治四十五年卒）がこられただけでなく、講堂と図書館の壁面を書いて頂いた中山正實画伯（大正八年卒）

は、壁面の修理をして頂き、さらに、ご所有のエツチング百点余を神戸大学に寄付して下さった。

その後、益田乾次郎さん（大正九年卒）が、(株)ダイフク会長の退職金一億円にその利子も含めて六甲台後援会に寄付して下さった。その時の益田さんのお言葉が今も忘れられない。益田さんは兼松に入社され、店主房次郎さんには大変お世話になった。その店主が母校の基金として提供された株式は、満鉄株と兼松羊毛工業株とであった。ところが残念ながら今は二つとも無価値になってしまつている。私はそれを少しでも補うことができたと思う、と言われたのである。それだけではない。学生会館隣りの土地が、マンション業者に販売されそうになったことがあった。ご承知のように、建物が後から建設されても、その住人の人たちは隣りの建物の騒音に苦情を申し出ることができる。もし、そうなれば学生会館内の学生諸君の活動は大幅に制限されることになる。私はこの困難を克服するために何としても皆さんのご協力でごこの土地を購入したいと訴えた。その時益田さんは、そんな土

地は何としても大学が持つていなければならぬ。私を持つているダイフク株三十万株を寄付してあげてもよいと仰言つて下さった。お蔭でその土地九四七平方メートル（約二億一千万円余）は大学の所有になっただけでなく、株の値上がりで一億五千万円近く剰余金が出たこともあって私は益田さんとも相談して、その金額を工学部の研究基金にすることができた。

また、トヨタ自動車(株)の会長をしておられた花井正八さん（昭和十三年卒）は、六甲台後援会に一億円寄付して下さっただけでなく、大学運営資金として二回にわたって百万円をご寄付して頂いた。さらに、つい最近ご逝去された神原藤佐尾さん（昭和七年学部卒）からも一億円の寄付のお話を頂き、私は二回、渋谷区松涛のご自宅に参上して、これは大学全体の基金として受け入れることになり、何らの基金もない複数の学部の研究支援のために使わせて頂くことにした。

それにまた、皆さんよくご存知俳人山口誓子さんの奥さん波津女さんのご遺産と誓子さんのご財産全てをご寄付頂くことになった。

山口誓子さんご自身は三高・東大のご卒業であつたが、奥さんの弟さん末永山彦さん（昭和十九年卒）は、私の県立神戸高商時代の同じゼミの先輩であり、奥さんのご遺産のご寄付のお話をうけ賜ることができ、その後、山口誓子さんとは何回となくお会いする機会を持つことができた。文化功労者になられた時は、神戸大学名誉博士号の規定をつくりその第一号になつて頂いた。そのお祝いの会には元総理大臣の宇野宗佑さん（昭和二十一年中退）も駆けつけて頂き、ご遺産の中から日本文学研究の大学院生への助成や、当時の教育学部、文学部および教養部の若干の研究助成を行うことができるようになった。

学生スポーツ会館も

少し長いお話になつたが、高井恒昌さん（昭和十五年卒）や市川義雄さん（昭和七年学部卒）のこともご報告しておかなければならない。高井さんは硬式野球部でご活躍であつたこともあつて、大学野球部の運営には年来相当なご支援を頂いていた。ところが、私が学長をしていた頃、ご承知のようにわが大学の

アメリカン・フットボール部が甲子園ボウル出場を賭けた関西リーグの決勝戦にまで進出したことがあつた。私は当時、高井さんが私財を投げうつて設けられた千趣留学生奨学財団の副理事長にもなつていた。同じ理事の一人からも奨められて私は厚かましくも部室建設をお願いした。高井さんは、その願いを聞き届けて頂き、立派な高井記念神戸大学学生スポーツ会館が竣工した。市川義雄さんは、

闘病生活の最中、自分の世話になつた兼松(株)が創設した(財)兼松貿易研究基金に役立てたいと申し出をされ、かつて本誌でも紹介した(第三六二号)ように、同基金に三千万円を寄付して頂き、同財団の理事長を務めておられた三輪徳泰副社長（現在の社長）が、役員会でこういう立派な先輩をわが社が持つていることは、私たちの誇りであると言われたのが忘れられない。

この機会に、私のやはり学長時代、兵庫トヨタ(株)の会長瀧川勝二さんが、ご寄付下さつた学術交流会館のことについてもふれておかなければならない。瀧川会長のご子息博司社長は、県立神戸商科大学のご卒業で直接神戸大学と

は関係なかった。ところが、その神戸商大へ約一億円のご寄付の計画があり、会長・社長をよく存じあげている私が懇願に行けば、神戸大学にもご寄付頂けるかも知れないと教えて下さったのは、同社副社長山本實さん（昭和二十五年卒、予科三回生）であった。しかし、それが可能になったのは、私の懇願ではなく、長年同社のために献身的貢献をされた山本副社長をはじめ同社社員になっておられた神戸大学卒業の皆さんのお蔭である。皆さんも何回か瀧川記念学術交流会館での会合に参加されたことと思うが本当にありがたいことであった。

私が図らずも勲六甲台後援会の理事長になつてからも、ニューヨーク在住の宮田ゼミの十場久嗣さん（昭和三十四年卒）と、後援会の副理事長をして頂いた三野重和さん（昭和二十三年卒）がそれぞれ一千万円と三千万円とを寄付して頂いた。さらに、私がここで述べさせて頂いた大学を取り囲む環境条件の変化に対応するために必要ではないかと考えられた平田二郎さん（昭和二十三年卒）は、先に大阪凌霜クラブのセミナー・ルーム購入の

ために一千万円寄付して頂いたほか、百万円寄付して頂き、私自身もそれに前後してまず隗よりはじめよと思ひ百万円寄付をさせて頂いたが、さらに高崎正弘さん（昭和三十四年卒）から百万円を、それらのことを六甲台後援会の報告書でご覧になった榎崎正博さん（昭和三十年卒）も同じく百万円を送金して下さったし、平田さんのお誘いで江草精一さん（昭和二十三年卒）も百万円ご寄付頂いた。

六甲台後援会へのご協力を

六甲台後援会は、財団法人の中でも幸いにして特定公益増進法人のご承認を頂いている。したがって、当後援会への個人および法人のご寄付は所得税法および法人税法の規定による控除措置を受けて頂くことができる。昨年十一月には十二回生（昭和三十九年卒業、代表幹事酒井信次氏）の皆さんが卒業四十周年記念集会で百万円余を、またこの五月には予科の創立六十五周年記念式典（思誠会会長嘉納尚氏）でさらに百万円のご寄付を頂戴したが、このアツピールをお読みいただいた機会に、私は皆さんに金額のいかんを問わず、六

甲台後援会にご寄付を賜りたくお願いしたい。六甲台後援会は従来、教員の海外の研修・留学、学外での報告などの旅費を助成しただけでなく、研修成果の発刊その他にも援助してきた。先に述べた東京大学の小宮山学長の言われるように、これから優秀な学究の神戸大学への誘因の一つになることは間違いない。なお、社団法人凌霜会の活性化も今迄何回か本誌でもふれておいたように大きな課題である。先日の凌霜会総会でも会誌「凌霜」の編集方針をはじめ、準会員募集の仕方、新卒者の入会促進、一般会員の会費支払いの促進や会員増強等多くの問題が熱心に討論された。凌霜会にしても六甲台後援会にしても、単なる討論の場ではない。会員の一人一人が、自ら北川さんの力説される蝶になって、それぞれ独自に自分のできることを尽くしていくことが望まれる。その動きの中から、六甲台五部局は神戸大学全体、いや、日本全体の大学を動かす活動を見出すことができるようになるであらう。